

## 1 はじめに

先にお話をさせていただきますが、レポートに出てくる生徒に対して、私が実践したというものではありません。本校職員である担任が中心になり指導をされ、保護者との信頼関係を築かれ、もうすぐ卒業を迎えることができるころまで来ました。私は、そのきっかけをつくったに過ぎません。特に入学前後の、連携を中心にお話しさせていただきます。

本校に勤務して11年目を迎えます。本校は、77年の歴史をもつ工業系の高校です。「九州工業高校」といった方がなじみがある方が多いのではないのでしょうか。現在、工業系【機械、自動車、電気、情報技術、建築】の5学科、家庭科系の【調理】、芸術系【美術】、普通系【普通】の計、8学科があります。元々男子が多い学校でしたが、校名変更後、多方面の学科で女子が入学するようになり現在では23%を占めるようになりました。

さて、今から9年前初めて担任を持たせていただいたときにある生徒と出会いました。その生徒の入学志願票には「アスペルガー症候群」と書かれてありましたが、当時、何の知識もない私にとっては『志願票に記入されていること』がどのような障害なのか、担任や保護者がどんな思いをもって記入されたのかまったく理解できていない状態でした。入学式後、保護者と話し、その生徒と保護者との関係がスタートしました。その生徒や保護者からたくさんの宝物をもらいました。そのおかげで保護者の思い、中学校担任の思い、なにより生徒のことを少し理解することができました。そして、その後の教育活動に大きく影響する考え方や方法などを教えてもらえました。今日は、その一部をみなさんにお話しさせていただこうと思います。

## 2 Aさんのこと

### ① 中学との連携

以前の同僚から連絡がありました。「先生の学校に進学を希望している生徒がいます。ちょっと相談ののってもらえませんか？」と。その生徒は、ADHDの生徒で、特別支援学級に在籍していました。中学校を訪問し、本校の特徴や受験のことなど担任、校長、生徒指導を交えて話をしました。(彼を変えた担任との出会い)

Aさんは、本校のオープンキャンパスにも参加し、とても積極的で明るい生徒という印象でした。体験授業をととても楽しそうに受講していたのを今も覚えています。

2回目のオープンキャンパスには、公共の交通機関を使い、実際の通学方法を想定しての参加でした。

### ② 入試に向けて

入学試験に関して特別な配慮は必要ないとのこと。

本校、美術デザイン科は、国語、英語、実技の試験があることや全員集団面接があることなどを伝え、対策を練っていただいた。その結果……。

### ③ 中高連絡会（入学に向けて）

入学に向けて、中学校の先生にお願いをして、中学校で保護者、担任、校長と話をする場を設けていただいた。受け入れる生徒のことを少しでも解っておきたいことと、保護者につ

ないでほしいことが大きな目的でした。

それまでの中学校での取り組み・それまでの生き立ちや家庭での A さんの様子など、「個別の支援計画」をいただき話をしてくださった。

中学校で話ができただけで、ご両親も熱心にまたオープンに話をしてくださった。何度もぶちあたって壁を家族の思いと絆で乗り越えてきたこと。その思いを綴った A さんの作文を見せていただいたとき、胸が熱くなりました。

中学校の先生方がしっかりとした取り組みをされ、その、姿を見て生徒とのまた保護者との良好な信頼関係を気づいてくださっていたからこそ、本校へとつないでいただくことができました。そして、事前にできた面談の様子やそれまでのやりとりで中高の関係を見てくださったからこそ、保護者も本校職員のことを信頼してくださったと思います。

### 3 B さんとのこと

#### ① 中学校、保護者との連絡会

入学前に、保護者、中学校担任、支援センターが来校され、4 者で引き継ぎのための話し合いを持たせていただくことができました。B さんは、高機能広汎性発達障害であること。知的な遅れはないものの、精神的な行動や言動がとても幼いことなど、学校生活において B さんに対して配慮してほしいことや関わり方などを話してくださった。中学校での取り組みの様子、これまでの B さんの成果と課題を本校では初めて見る個別の支援計画を受け取り話をしていただいた。幼少の頃より多くの方が B さんに関わっていることがわかりました。

「B は、こんな所があるんですよ。」と明るく笑いながら話されているお母さん。冷静に的確に話をしていただいたので、入学後「あっ、このことか！」と思い当たることがたくさんあり、B さんの行動を理解する上での貴重なアドバイスとなりました。

#### ② 災い転じて・・・

多くの先生に関わってほしい反面、学科の特異性からか限られた先生との交流しか持てていない現状がありました。しかし、ある意味、目立つ生徒であったため突発的に起こる事例に対し、どう対処していいものかという場面も多く見られるようになりました。

ある日、B さんは問題行動で指導されたことがあります。保護者はとても嘆き悲しまれていましたが、そのことがきっかけとなり、多くの先生が関わりを持つ機会が増えるようになりました。そのことが後に B さんによい方向となっていきました。なにより、B さんを知り、理解する絶好の機会となっていったからです。ことあるごとに声をかけてくれる先生が増え、B さんにとって怖い存在であった特定の先生と色々な話ができるようにもなり、教師の話の中に B さんの話題がよく出るようになっていきました。

#### ③ B さんを見守る環境

入学に際して、心配事はたくさんありましたが、一つひとつ B さんの成長と家族の支えにより卒業後の進路に向かって毎日を過ごしています。課題はまだまだクリアできていない事も多く、十分なスキルアップがなされたとは言えない面も多いですが、教室で友人らと談笑する B さんの姿を見るとほほえましい気持ちにさせてくれます。

入学後、保護者は学校を頼ってくださったし、学校も保護者を頼らせていただきました。この関係があるからこそ、B さんを見守る体制やクラスづくりができたのだと思います。

#### 4 わかってほしいこと

##### ① 「きつかったですね。」保護者の想い

発達障害をもつ生徒の保護者と入学前などにお話をさせていただいたとき、皆さんこれまでの気持ちを笑顔で話してくださいませ。

子どもの発達に疑問を抱き始めたとき、認めなければならないが認めたくない気持ち、心のどこかで明日にはできるようになっているのではという気持ち、また、親としての自己嫌悪とともに自分や子どもが悪いのではなかったという安堵感、周りから理解してもらえないいらだちと絶望感など、共通の想いを抱いている事が多いです。

「今、笑って話されていますが、それまではきつかったですね。」と声をかけると同じように声を詰まらせます。

##### ② ここにたどりつくまでの道のり

まず皆さんが言われることが「本当に高校に行けるとは思わなかった。」次に「高校に行ってもうまくいかないのではないのか。」卒業することを念頭に入学してくるのではない場合が多いことを感じます。過去にも入学に際して事前にお話に来てくださるケースが数件ありました。同推をしていた時や入試担当の時に直接お会いして話をさせていただいたことです。皆、一様に集団になじめず、苦勞されていて、対人関係から不登校を経験したりするケースは少なくありません。むしろ、休まず通学できていることの方が少数のように感じます。

高校受験に際しても、「高校は受け入れてくれるだろうか?」「高校に行けないのでは?」また、「高校でも不登校になるのでは?」と悩みは尽きません。ある意味、入学に際しては、やっとここまでたどり着いたという印象を強く感じます。

##### ③ 特別でない特別支援（ユニバーサルデザイン化）

必ずはじめにお話しさせていただくことがあります。「本校では、特別支援コーディネーターをおいて特別に取り組みをしている学校でも、特別支援教育に特化した学校でもありません。できることは限られていますが、精一杯頑張りますので、一緒に頑張りましょう。」と。保護者や外部組織との協力・連携なし、本校単独では生徒の把握や指導ができない場面が数多く見られます。本校は、組織も含め、「特別支援教育」に関して決して進んでいるとは言いがたいです。対処する職員のスキルや考え方により対応が変わってくることも多々あります。まだ、「発達障害」を持つ生徒の理解を深めることからはじめている状態でもあります。少しずつではありますが、理解し、共感する職員も増えてきています。

「特別支援教育」と呼ばれている支援体制が、どの学校でも当たり前実践され、障害をもっていてもそれは個性ととらえられることがスタンダードとなる教育活動にしていかなければと思いますし、教員として実践していかなければならないと思います。

##### ④ 中学の先生の思い

中学の先生と話す機会が多い部署にいたことから「〇〇はどうしていますか?」と尋ねられる事が多いです。一昔前よりは改善されてきたと思うが、高校に入学したからには中学や他の機関に頼むのはおかしいと考える、ある意味プライドを持っている教師も少なくないという現状があります。少なくとも生徒の為に多くの情報を持ち、生徒を理解することができるのであればプラスにならなくてもマイナスになることはありません。「どんどん、わたしたちを頼ってください。」よく、中学校の先生は言ってくださいませ。生徒の為にと思う気持ちは卒業後も変わりはないからです。